
なもう霊

まめふじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なもう霊

【Nコード】

N7389N

【作者名】

まめふじ

【あらすじ】

月に雲のかかった不吉な晩、漁に漕ぎだした漁夫たちを襲ったのは時化。風と波にも負けず「櫂を貸せ」との声が聞こえてきた

(前書き)

ホラーと名乗りながら、まったくホラーではございません。
ちよっぴりスパイス程度に入っているはず……入っている……はず
？

月に雲がかかるとは、古来より不吉の証でございました。
これは、とある貧しい漁村におきた、哀しいお話でございます

その晩、まん丸の月には薄雲がかかっておりました。

満月雲はことのほか、不吉なものとされています。満月雲があがれば、人々は家にこもり、戸を固く閉じ、火をけつして絶やさずに朝を待つのが常です。

しかし、その日は違っておりました。

どうしても、漁にいかねばなりません。一年に一度だけ巡っていく大切な日なのです。

漁夫たちは、内心の恐怖を押し殺し、舟の準備をし始めております。漁夫の家族らは、気丈に握り飯などを作りました。海つ宮様のお札も、もらってきました。

月に雲がかかっていること以外は、すべて良い状態でした。空には星がまたたいていますし、遠くの間ではぼんやりと海神雲が鎮座しております。

「いつてくるでお。まっとうてちよおよ。でっきゃあ魚とってきたるでえ」

そう言つて、漁夫たちは海へと舟で漕ぎだしていきました。浜では、漁火が見えなくなるまで、家族らが手を振っておりました。

夜風が舟を押ししていきます。漁夫たちが櫂をこぐ間もなく、舟はぐんと沖まででてしまいました。誰ひとりとして、口をききません。黙々と太い縄を海へ下ろします。隣の舟とは、ちいさな灯りで意を伝えました。暗い海原に、点々とちいさな灯りがともっています。村にあるすべての舟が、海に出ておりました。

右舟の太縄をおろし、左舟は広網を広げていきます。大舟では鈍

く輝いた鍔が用意されました。そのあいだ、ひとつも言葉はもれません。ただただ、静かな漁でした。

海は黒々とうねり、いまにも夜空を呑み込みそうです。

ひとつ、ちいさな灯りが振られました。

それに応えるように、次々に灯りが振られていきます。右に振られ、左に振られ、上にも下にも、丸を描くようにも振られます。

海のなかをなにかが泳いでいるようでした。ときおり、水しぶきがあがります。大きな音をたてて、水面が叩かれました。海のなかを泳ぐものは群れとなつてつき進んできます。広網をはっていた舟が、ぐうんと揺れました。勢いにひかれ、三艘の船腹がぶつかります。

水面がはげしく暴れました。網につかまったものは、絡めを破ろうと必死になつて尾を振ります。三艘の網舟がふんばっているうちに、反対側にも三艘、舟が回り込みました。

太繩をおろし、鍔で大きな魚を突こうとしたときでした。

遠くで低く海雷りが響きました。漁夫たちは、驚いて顔を上げます。

「……網をあげるッ」

頭の漁夫が小さく鋭く叫びます。頭である年老いた漁夫は、あわてて言いました。

「大風がくるぞッ」

その言葉通り、あたりはふいに冷たい風に包まれたのです。

月に雲がかかった不吉な晩。海雷りがしたのならば、大風が来る。時化になる。

大粒の雨が海面を打ちました。広網をはなつと、何頭もの海豚たちが泳ぎ去っていきます。鯨組にみつかつていない、ちいさな群れでした。

雨に打たれ、ちいさな灯りが次々に消えていきました。猛風が海面をうねらせます。

漁夫たちは海つ神の御名を叫んで、必死に舟にしがみついております。

す。ぐうんぐうんと恐ろしいまでの風と波です。どうすることもできず、漁舟は木の葉のようでした。

ふと、遠くに黒い舟が見えました。年かさの漁夫が気づき、目をよめます。そして、大きく目を見開きました。

《權を……權をお貸しなさい》

どこからか、澄んだ声が聞こえてきました。時化の波風に負けず、しっかりと漁師たちの耳に届きます。

《權をお貸しなさい。權を》

あまりの出来事に漁師たちがぼおっとしておりますと、一層うねった波が漁舟をゆるがしました。ざざざッと船底がなにかにこすれます。

「なもう霊だ」

だれかが、低い声でいいました。その瞬間、舟の中が凍ったように静かになりました。そして、どこからともなく不安の波が押し寄せてきたのです。

彼らは、“なもう霊”を知っておりました。

時化の海に現れ、「權を貸せ」と言う異形です。權を貸したが最後、その舟は時化の海に沈んでしまふと云います。權を渡してはいけません。応えを返してもいけません。

漁夫たちは、ただただ固く口を閉ざしました。それでも、声はやみません。

《權をお貸しなさい。このままでは、あなたたちは不帰路に行くことになります！ わたくしに、權をお貸しなさい》

漁夫たちはけっして、權を貸そうとしませんでした。声はやみません。漁夫たちは權を貸しません。

《わたくしに權を……！》

壁のような波が漁夫たちの乗った舟を襲いました。嵐の中、少女の悲鳴のような声が響きました。

《わたくしに、權をお貸しくださいなれば……》

漁夫たちの乗っていた舟は、跡形もありません。浮かんでいるの

は漁具とわずかな漁夫のみ。漂う漁夫は、必死に板きれにしがみつきました。顔が水面に浮き上がった瞬間、頭上で大きな雷が光りました。一瞬だけ、漁夫の目にあたりが映し出されます。

「おみやあさん……」

少女がひとり、立っておりました。緑々とした長い髪を結い上げ、白い小袖に紅い帯。透き通った白肌に紅唇がぼつてりと愛らしく描かれています。

「たすけてくれ、後生だから！」

《わたくしに、權をお貸しくだされば。わたくしは、舟しか動かせませんのに……》

そう言っつて、少女はふうつと消えてしまいました。あたりは暗闇です。ぼうつとしていた漁夫は、次に来た波に呑み込まれていきました。

時化の海は、すべてを呑み込みこんでしまうのです。

朝日が照らす海原は、青々と静かな姿をしておりました。

そのただなかで、ひとりの少女が泣いております。さあさあと、静かに涙を流しております。緑色の髪が海面を漂い広がっています。ちいさな海豚たちが、少女をなくさめるように歌いました。つややかな彼らを撫でながら、少女はちいさく祈りました。

《……大いなる海つ神様、あの方々を安らぐ根國にお送りくださいませ》

少女の声は、静かな海原に消えていきました。

なもう霊という、海に漂う異形のお話にございます。

(後書き)

じつはどこかで異形屋と繋がっていたりします……？
まったくホラーではございませんでしたでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7389n/>

なもう霊

2010年10月9日05時35分発行